

「ちくらす」の取組で見えてきた「木」の可能性

3月14日(日)午後、小倉キャンパスで開催された「2020ちくらすシンポジウム」に参加しました。「ちくらす」で検索すると「京築のヒノキと暮らすプロジェクト」と出てきます。京築は福岡県京都郡と築上郡とを合わせた地域のことで良質なヒノキ材を産出するのですが、安価な外材に押されたり、建築工法が変わったりして森林が荒廃はじめていました。そこで2015年から京築地区森林林業推進協議会(2市5町、森林組合、県、森林管理署)と大学とが連携して森林資源の新たな利用方法を考える活動を行っています。

今回は「仕事を伝える木のおもちゃ」の提案がテーマでした。ヒノキ材からは高い抗菌作用を持つテルペン系のフィトンチッドが出ており、例えば生ものを扱うお寿司屋さんのカウンターにはヒノキの1枚板が使われています。抗菌効果以外にも(1)丈夫で長持ち(2)壊れても直せる(3)適度な重さがある(4)作りが単純なため遊びが広がるなど、細かい加工が不要な幼児のおもちゃには木が断然よいと考えられています。

ところで、国は2009年に2020年の木材自給率を50%にするという目標を掲げ資源の有効活用や地球環境の観点から国産材の利用拡大に取り組んでいます。まだ目標に達していませんが、自給率が最低だった2006年の18.8%から2019年には37.8%まで上昇しました。戦後植林された多くの木々が概ね50年生以上になりつつあり利活用可能期に入っています。

一方、林業においても航空レーザー計測による立木や地形把握、森林GIS(地理情報システム)などが導入されICTが活躍する時代を迎えています。また、木材の弱点を補うCLT*の研究や難燃加工など工学分野の研究も格段に進んでいます。森林が国土の3分の2を占める日本、カーボンフリーにも寄与する木材の可能性を考えさせられたシンポジウムでした。

本学では木材建築の可能性を学生に伝えるため、4月から寄贈を受けた法隆寺の精密模型を小倉キャンパスに展示することにしています。

*CLTとはCross Laminated Timber の略称で、ひき板を繊維方向が直行するように積層し接着剤で圧着した木質材料。高強度で収縮変形が少なく、建築の構造材(中高層ビルも建築可能)のほか土木用材、家具などにも用いられる。

ポストコロナ時代の地方を考える

卒業式が終わり、18歳と22歳の多くの若者が住み慣れた故郷を後にして首都圏に移動する季節です。福岡県内の高校生の県外進学率は約35%で進学先のトップは東京都です。また、北九州市内の大学生の25%が卒業後、首都圏に就職しています。首都圏は大学や職業の選択肢が多くあり、給与水準が高く、文化やスポーツへのアクセスも容易で全国から多くの若者を引き寄せています。

一方、今回のコロナ禍でデジタル化が加速、テレワークの進展とともに本社やオフィスの一部を地方に移す企業が現れるなど、どこにいても仕事が出来る環境が整ってきたのも事実です。また、情報通信技術の発達とともにスマホの機能が向上し辞書・辞典はもとよりゲーム、音楽・映画鑑賞からオンライン授業まで多くの価値を引き出す魔法の箱として地方在住者の満足度、幸福感を上げることに貢献しています。

ものづくりで成長してきた日本はグローバル化の進展とともに経済の低迷が続き、この四半世紀、中間層の所得は減少しています。人口減少が続く日本が先進国として生き残るには生産性の向上が不可欠と言われています。このような中で俄かにテレワークを活用した企業の地方立地がクローズアップされてきました。地方は自然が豊かで住居費が安く職住近接で時間を有効に使えるなど生活がしやすく多様なライフスタイルを実現できるからです。

この視点を活かして地方の企業立地を具現化するには首都圏と比較して実際に生産性が向上することや労働者の満足度が高くなることを示す指標が必要です。これには住居費やゆとり時間の数値化、教育や文化などへのオンラインアクセスでの満足度に加え、東京か地方かという二者択一ではなく片方に拠点を置いて行き来するなども選択肢にする柔軟な発想が重要です。まだ具体案はないのですが地方にチーム拠点があるJリーグや有力なIT企業の本社が多数集まるシアトル都市圏にヒントがあると考えています。大学の力量が試されています。